

司会：それでは時間になりましたので、午後の行事の講演に移ります。講師の伊藤亜紗先生を、横田会長がご紹介申し上げます。よろしくお願いいたします。

横田：失礼いたします。本日ご講演をお願いする伊藤亜紗先生を、ご紹介させていただきます。会員の皆さんには、事前に資料として配布をさせていただいたとおり、伊藤先生は、2010年に、東京大学大学院を単位取得退学して、同年に博士号を取得されています。ご専門は美学、現代アートでいらっしゃいます。2013年に東京工業大学にご着任され、現在は、2020年2月に創設された東京工業大学科学技術創成研究院、未来の人類研究センター長にご就任され、ご活躍をされています。著書に、『目の見えない人は世界をどう見ているのか』、『手の倫理』などがございます。受賞歴として、第13回（池田晶子記念） わたくし、つまり Nobody 賞、第42回サントリー学芸賞などがおありです。先生は気鋭の美学者として、多くのメディアでのご活動が、よく紹介をされています。私自身は、生徒たちに、大学入試に過去問を使って入試対策を行う中で、先生の著作と出会いました。そこでは『手の倫理』の一部が引用されていたのですけれども、人の体の在り方や、コミュニケーションについての先生の視点、論説が、非常に興味深いと思いました。

令和5年度の本大会の講師先生について検討する中で、学会員の皆さまからも、先生のお話を拝聴したいという声も多く挙がっており、今回伊藤先生に、国語学会員の皆さんにお話しただけならば、非常に貴重な機会になると考えまして、失礼も顧みず、講演のご依頼をさせていただきました。先生からは快くお引き受けを頂き、また本日は、会場からの質問にもご回答いただけるということで、その温かいご配慮に、改めてお礼を申し上げます。本日はとても楽しみにしております。それでは伊藤先生、どうぞよろしくお願いいたします。

伊藤：皆さん、こんにちは。顔が見えてますでしょうか。こんにちは。よろしくお願いいたします。

横田先生、大変過分なご紹介を頂戴いたしまして、本当にありがとうございます。今日は本当にこのような貴重な機会を頂いて、大変光栄です。今日は、私は今、大変緊張をしています。国語の先生たちを前に話すという状況が、とても私に緊張感を与えているのです。準備段階でもお話したのですが、ここでお話する資格がない気がするとか、とにかく学生時代に国語が大変苦手な出来の悪い学生で、常に先生に迷惑をかけ困らせていたものですから、私がこんな高いところからお話しさしあげるのが、本当に何か申し訳ないような気持ちです。これは本当に謙遜ではなくて、本当にできなかったのです。入試でしたら半分も取れなくて、当時大学入試のときは理系の学生だったので、他でカバーするしかないというふうな状況だったのですが、何で国語がこんな苦手なのかということ、時々やはり考えます。いろいろ理由はあるとは思いますが、とても何か、自分の性格が少し曲がっているとか、国語ができない生徒にはよくあることだとは思いますが、何か説教をされているような気がしてしまうのです。読んでいて、自分はこう思うのだけど、正解はこっちですと言われると、「そうかな？」というような気になって、人間としてそういうふうに感じられないことが、間違っているみたいにお説教されているような気がして、どうしてもどんど

ん性格がひねくれていくのです。

その中で、自分の興味も、やはりど真ん中というよりは、どうしても端っこ、健常者よりも障害を持っている体の方が面白いと思ったりします。大学では芸術の教員ですけれども、芸術というのも、一般にはこうなっているかもしれないけれども、こんな可能性もあっていいのではないかというふうに、少し別の可能性を提示するような、そういう社会的な営みののだろうと思うのです。そういう意味で、何かどうしても真ん中からはずれがちなこの性格というのが、良くも悪くも、国語によってつくられたような気がしてしまっていて、それは研究者としては良かったのかなと思います。研究というのは、みんなが信じていることに対して、問いかけていくという、そういう営みですので、そういう意味で、国語は苦手だったのですけれども、それによって鍛えられたというか、自分にできることを発見したとも、前向きに、考えれば言えるのかなと思いついて、そんな経験の中から見えてきたことというのを、先生方に、今日はお話しさせていただけたらと思います。よろしく願いいたします。

では、画面共有をさせていただきます。今日は事前にお伝えさせていただいたとおり、「言葉で感覚を手探りする」というテーマで話をさせていただきます。なぜこのテーマなのかということは、私自身の経験のバックグラウンドに関係してくることなので、少し自己紹介をしながら、ご説明させていただきます。私は、先ほども申し上げたとおり、大学に入ったときは理系で、大学3年から文転という、いわゆる文系に転向するということをして、現在は東京工業大学という、東京にある理工系の大学の中の文系の教員として、理系と文系の両方に関わるような、そういう仕事をしています。大学に入ったときは、理系の中でも、特に生物学に進みたいなというふうに考えていました。小さいころから、シンプルに動物とか昆虫とか植物が好きだったので、そういうことについて勉強したい、もっと知りたいというふうに思っていました。特にどういうことに興味を持っていたかということ、何か自分と大変違うなというふうに思っていたのです。例えば昆虫というと、サイズも非常に小さいですし、人間のような脳みそもないわけです。神経が、脳のような中枢を持っていないわけです。さらに冬眠をしていたり、サナギになって変体をしていたり、人間からすると、もう信じられないようなライフサイクルを持っているわけです。さらに人間には見えないような紫外線を見ることができたり、空を飛べたり、何百匹という子どもを産めたりと、もう全てが違うなというふうに思いました。そうなったときに、本当に共存をしているのかということが不思議で、物理的には同じこの地球上に、昆虫たち動物たち、自分も住んでいるのですけれども、何かそれは本当なのか、物理的には同じだけれども、見えている世界は相当違うのだろうなというふうに想像することが、とても面白いというか、何かそういうことに取りつかれるような、そういう子ども時代というのを過ごしていました。研究すれば、想像の中で、昆虫に変身できるのではないか、動物に変身できるのではないか、もっと自分に見えているこの世界の姿でない世界の姿、そういうのがあり得るのではないかと、そんなことを思って生物学に進学しようというふうに思いました。

しかし、実際進学してみると、だいぶ想像と違う世界でした。やはりそんなにのんきな感

じではないのです。私が大学に入ったのは1998年ですけれども、当時は、やはり全ての学問分野で、情報化が進んでいて、大学の授業も、何とか情報学というのばかりでした。生物学もやはり情報化が進み、DNAの塩基配列を全て解読しながら、生命の秘密をはぐという、そういう雰囲気でした。現代では、そこまでDNAを絶対視するというような生物学は主流ではないと思うのですけれども、当時はそれが最先端で、何か生物なのに、情報化を進めるのです。私自身は、そのことにどうしても乗れないわけです。DNAを調査するためには、生き物を捕まえて、まずすりつぶしてしまうのですが、そのすりつぶした時点で、私の興味は終わるのです。もう生き物ではなくなるわけなので、単なる物質になってしまいます。私が知りたいのは、その昆虫、その動物だったら、世界はどう見えているのか、その体で生きていくというのはどういうことなのだろうという、生活そのもの、生きていくことに興味があったのですが、ただの物質にしてしまうというところで、私はもう興味を持つことができなくて、それで、自分の興味というのは、分解して情報化して記号化するという方法ではなくて、もう少しアナログというか、生命全体に関わるような、そういうことなのだろうということに、だんだん気が付き始めました。それで大学3年で文転を決心して、文学部に進みました。

大学時代は、理系の授業は、あまりいい思い出がないのですが、唯一覚えていて、私も大学教員になってから、時々思い出すいい授業というのがあります。それは生物学の先生が、週末に釣ってきたとても大きなカツオを、いきなり教室の教卓にぼんと載せて、それを解剖し始めたという授業でした。普段は普通に教科書があつて板書してという、そういう授業なのですが、急に、いきなり本物の生物を持ち込んで、それを解剖するというのをし始めたのです。カツオなのでさばきます。解剖というよりは、「さばく」なのです。さばいたら、その中に回虫、長い寄生虫とかが多く出てくるわけです。先生がそれを1個ずつピンセットで取り出して取り除いた上で、その身を切って、醤油と一緒に回すという、今考えると、大丈夫なのかなという授業ですが、でも当時の私には、何かそれが生きていうことだなと思えたのです。つまり、カツオの体の中には回虫がいて、その他にも、何か違う生物が生きていたかもしれません。もっと雑多な世界というのを、動物、植物が生きていて、何かその全て、その全体というのを、生々しさを、その先生は、カツオをさばくということを通して、私たちに教えようとしていたような気がして、そのことに大変感銘を受けました。私自身が間もなく大学教員になってからも、なるべく抽象化しないというか、やはり学問と実際の世界とは違うので、なるべく実際の世界にちゃんと足をつけた形で授業をしたい、そんなふうに普段思っています。

話を戻しまして、大学3年で文転をして、行った先が美学、美しい学という学問分野でした。美学は、あまり一般的には知られていない学問かなと思います。ヨーロッパで18世紀半ばぐらいにできたので、それなりに歴史は長い学問分野です。どうしてもそこで美学というと、少し違うニュアンス、男の美学とか、何かそういうイメージで聞こえてしまって、学問分野だとは思われていないかもしれませんが、れっきとした学問分野です。よく言われる

言い方は、哲学の兄弟という言い方です。哲学と同じように、道具は言語です。言語を使って、問いを解いていく、そういう作業をしていくのですが、どちらかという、哲学と美学の間には、決定的に違うところがあります。それは何かというと、哲学の場合には、問いの言語です。時間とは何なのか、存在とは何なのか、人間とは何なのかという形で、言語で問いを立てて、それを言語で分析していく、それが哲学です。

それに対して、私がやろうとしている美学というのは、もっと言語化しにくいものです。もっと曖昧で捉えがたいもので、それをあえて言語を使って分析していこうという、そういう学問です。例えば私たちの感性とか身体感覚とか、それから芸術作品を見たときの印象とか、そういうものというのは、最初はやはり言葉にしがたいと思うのです。何か非常に受け止めているし感じているのだけれども、ずっと言葉にはできません。でも時間をかけてゆっくり変換していくと、だんだん言語化できるようになります。私が専門としている美学というのは、そういう学問です。

そういうわけで、カツオのような状況で、雑多な状況です。言語というのも1つの情報化ですし、抽象化だと思えます。リンゴと言ったときに、一個一個のリンゴの差異というのを全部消して、リンゴというふうにくくってしまうわけなので、言葉自体も抽象化作用だと思えるのですが、そこを疑っていきます。もう少し言葉にする前の雑多な状態です。そういうところに目を向けようというのが、私にとっては大変興味深いものと思って、この学問を専攻しました。

今日の私のお話のタイトルは、美学という学問がやっていることです。言葉と感覚というのは、相性が悪いものです。言葉は言語ですし、感覚というのは言葉にしにくいものです。でも、その2つを結び付けることによって、感覚も磨かれます。言葉を使うと、どんどん感じるものが深まっていくし、言語の方も、やはり感覚と出会いながら、丁寧に使っていくと、とても磨かれていくと思うのです。そういう、少し仲が悪い感性とか感覚と言葉というのを、うまくすり合わせることによって、両方が深まっていく、そういうことを、私は研究の中でやっていて、今日はそういった観点から、お話をやっていきたいなと思っています。

その美学という学問の中で、私は特に人間の身体の問題に関心を持っています。身体というのも、やはり1つの言葉で、言葉にすると身体なのですけれども、実際に私たちが持っている体そのものというのは、一つとして同じではないわけです。皆さん性別も違うし、体重も違うし、病気を持っていらっしゃる方がいたり、障害を持っていらっしゃる方がいたり、皆さんさまざまな特徴や性能を持っています。そういう体一つ一つの差異というものを、もう少しちゃんと学問として扱いたいなというのが、私の興味関心で、学問はサイエンスなので、抽象化して法則を探すということも、もちろん重要なのですが、それと同時に、とても具体的な雑多な世界というのも見えていくという、その両方をうまくつないでいく、そういう仕事ができたらなと思います。

その中で、障害を持った方に特に注目をして、例えば視覚に障害のある方が、どんなふうに見ていらっしゃるのかということですが、当然視覚は使わないわけですから、

その代わりに聴覚や触覚というものが、健常者とは全然違う使い方をしているかもしれません。例えば新型コロナになって、視覚障害者は、みんな言っていることがあります。それは、とても道に迷いやすくなったということです。それはなぜかという、皆さんは、今でもそうだと思うのですが、顔にマスクをしていらっしやいます。視覚障害者は、空気の流れを、かなり顔で感じています。例えば道を歩いていて、十字路に出たとなると、少し空気の流れが変わります。その少しの変化というのを、顔で感じていたのですが、それが、顔が半分マスクにおおわれたことによって、感じにくくなってしまったのです。それで、本当は曲がらなければいけない十字路を、見逃してしまったりして道に迷うと、そういうことを、皆さんがおっしゃいます。

例えばこの例を考えてみても、触覚と言ったときに、健常者にとっての触覚というのは、基本的に手だと思えます。しかも、見て確認して、その後触るとというのが、健常者の場合の触覚だと思えます。一方、視覚障害者の場合に、触覚と言った場合には、手だけではなくて、両足とか両足裏とか、顔の表面とか、あと髪の毛とかです。髪の毛も空気の流れをよく感じると言いますが、そういうのも含めて触覚になるわけです。そうすると、もう全然違う触覚の使い方をしている、触覚が優れているというの、少し違うと思うのですが、健常者が、あまり使っていない触覚情報も、しっかりと使っているという、そういう方たちだったりするわけです。

そういう障害を持った方たちの語りというのを、私が直接お話を聞き、引き出す中で、何か人間の体の、全然気付かなかった可能性であったり、世界の全く別の顔だったりが見えてきます。触覚で捉える世界は、当然視覚で捉えるのとは違っていますので、世界の違う顔が見えるわけですが、そういうことを、本当に障害を持っている方から教えてもらって、そういう活動をしています。私はよく視覚障害者に言われるのですが、「僕たちを昆虫扱いしているんだよね」と、ひやかされます。私がかもともと昆虫に対して持っていた興味と同じ興味を、たぶん障害を持った方に向けているというようなところがあるからだと思いますが、彼らを通して、別の可能性、世界の見え方を探ろうとしているということです。

研究対象は視覚障害のある方だけではなくて、聴覚に障害のある方、ろうの方、あとは吃音の方であったりします。私自身も吃音があって、ごめんなさい、聞き取りにくいことがあるかもしれませんが、子どものころから、うまくしゃべれないことというのが多くて、それこそ国語の時間の音読などは、かなりしんどかったのですが、そういう方たち、私と似た方たちの話を聞くと、同じ吃音の中でも、全然違います。音読大好きという当時者もいて、吃音というカテゴリーの中に、本当にさまざまな方がいらっしやいます。そういうことを伺ったりとか、認知症の方にお話を聞いたり、四肢切断された方にお話を聞いたり、あまりジャンルを固定せず、さまざまな方からお話を伺っています。

そういう中で、私自身が、特に障害を持った方に対する研究者としての態度をもう少しまとめたのが、このスライドになります。一般には、誰でも同じというのを目指すというのが、障害に対するアプローチかなと思います。それは、いわゆる社会福祉と言われる分野です。

例えば全盲の方が、どこかの施設に行けないとなったら、全盲の人も行けるように、その道沿いに点字ブロックを配置しましょう。それで、見えても見えなくても行けるという同じが達成されますというのが、社会福祉の発想です。それはもちろん非常に大事なのですが、私が気になるのは、同じを実現したとしても、残る差異です。やはり全盲の人が白杖をついて、その施設まで歩くという経験と、晴眼者が視覚を使ってそこまで行くというのは、経験としては全然違うと思うのです。その差異が気になるのです。そこを見ていきたいというのが、私のスタンスです。それは美学という学問という中の、特に身体論といわれる分野になるかなと思います。

差異に注目するというのは、少しショッキングなことでもあって、差異を明確にするというのは、なかなか、従来の障害に対するアプローチではなかったアプローチかなと思うのですが、何か当事者の方と接していると、そこに注目するのが一番自然なのかなという気がして、結果としてこうなったという感じです。例えば全盲の方が、私に対して、こんなことをおっしゃいます。「そっちの見える世界は面白そうだね」みたいな感じで、何か関西と関東みたいな、文化の差として、見える世界と見えない世界というのを捉えていて、そこに、見えないから大変とか、そういう感覚が全然ないのです。言い方を変えると、健常者マイナス視覚が、視覚障害者では、全然ないのです。視覚障害者は、視覚がなくても成立している体を生きて、私たちは視覚を使った形で体が成立しているという、その差異を丁寧に見ていく、それだけのことなのかなと思います。

よくこの話を、4本足の椅子と3本足の椅子という例でお話ししているのですが、健常者が4本の足だとして、1本ない足を見たときに、4本を基準にしてしまうと、1本ないというふうに見えるのですが、3本足の椅子からすれば、3本でも、全く立っているわけです。そういう意味で、3本足の立ち方というのを、まずちゃんと分かった上で、必要に応じて何かサポートをするという、そういうふうにするのがいいのではないかと思います。4本足を基準にして、1本ないと言って、ぱっと何かをくっ付けてしまうというのは、逆に3本足が持っている可能性というのを捨てることになるのではないかと、そんなふうに思っています。

今日は、この4本足と3本足の例もそうなのですが、少しメタファーということについて、皆さんと考えていきたいなと思っています。比喻表現ですね。国語の問題のときには、必ず出てくるものかなと思うのですが、実際障害を持った方や病気を持った方のお話を聞くときにも、極めて重要です。メタファーが手がかりになって、その人が教えたいことが、ぱっと分かったりするということがあって、すごいなと思うのです。これについて、今日は考えていきたいと思います。

例えばメタファーで、どんなものがあるかなと思って、有名な例ばかり集めました。例えば新約聖書に出てくる、「あなた方は地の塩である」というのがあります。この場合の塩というのは、腐敗を防止するものという、それですね。だから地上が腐敗しないようにする、それがあなたたちの役割ですよという、そういう意味での地の塩です。これは人間を、塩と

いう全く別のもので例えているメタファーです。それから『推し、燃ゆ』みたいに、炎上すると言ったりしますけれども、炎上というのは、本当に火がついて燃えているわけではなくて、例えば SNS 上で、とてもやりとりが盛んになっていって、それに対して攻撃的な要素が強いときですね。そういう様相として、大変なことになっている、炎上している、燃えていると、そんなメタファーを、普通に私たちは使っています。それから「人生は長い旅路だ」と、こういう言い方もよくあると思います。人生を旅に例えています。こういうものが、メタファーだとすると、一般的な理解は、メタファーというのは修辞技法であって、表現上の飾りだと、文学的な表現だというものです。もっと直接的に言うことができるのに、少し格好付けて、飾りを付けて、別の言い方をしているのだといいます。例えば、あなた方は、地上が腐敗しないように……腐敗自体が少しメタファーですけれども、例えば地上に犯罪が起きないようにすることが、あなたたちの役割ですよと言ったら、もっと直接的な表現になったのに、そう言わずに、格好をつけて、地の塩と言っているのです。そういうなくてもいいもの、でもあると、少し表現として格好いいものというように、一般的にはメタファーというのは、そんなふうに理解されているのではないかと思います。今日は、本当にそうだろうかということを考えていきたいと思います。

少し導入が長くなりましたけれども、今日はこの3つのセクションに分けて、話を進めていきたいと思います。まずは「感覚を表す言葉」ということで、具体的に、私が研究調査をする中で出会った3つのメタファーですが、それを少し分析したいと思います。今日取り上げるメタファーは、全て摂食障害の方たちの事例から話を取りました。私が単純に、最近摂食障害の問題に大変興味を持っているということも大きいのですが、皆さんが高校の先生だということで、高校生で発症することがとても多いという意味で、もしかしたら、学校の中で、摂食障害の生徒さんと接する機会をお持ちかもしれないということも考えて、これを選びました。具体的にはこの3つのメタファーです。全部別の方がおっしゃったメタファーなのですが、最初が「DV 夫とその妻」というメタファーです。2つ目は「海ほたる」です。3つ目は「スイッチ」です。それぞれどういう意味なのか、考えながら聞いていただけたらと思います。

まず1つ目です。「DV 夫とその妻」というメタファーです。これを教えてくれたのはAさん、年齢は私と同じぐらいの女性です。この方が、10代で、高校生のときにダイエットにのめり込みました。よく摂食障害というのは、ダイエットが原因でなるというふうに言われているのですが、それは確かにそうなのですが、実際にお話を聞くと、それだけが目的ではないのです。例えばこのAさんの場合だと、ご兄弟に難病の弟さんがいて、ご両親が、ずっとその弟さんに付き切りの生活を送らざるを得なかったのだそうです。さらにご両親の離婚があったり、ご本人のAさんが、高校受験で、大変勉強を頑張ったのだけれども、第一志望に合格できなかつたりと、自分がこうしたいと思ったことが、なかなかかなわない環境でした。頑張っても、全然成果が出ないのです。そういう状態の中で、ダイエットというのが、やはりとても成果が出やすかったのです。今日は何カロリーだけ摂取しようと計画し

て頑張ると、ちゃんとそのとおり体重が減っていくわけです。Aさんは、こんなに手応えがあることは、他にはないというふう感じて、それでダイエットにどんどんのめり込んできました。勉強だったら、頑張ったからといって、点が取れるとは限りません。家庭環境も、もっとこうだといいのに思っているのに、そうなってくれません。そういう、非常に混沌とした生活環境の中で、ダイエットだけが、とても明快な成果が出る、満足しやすい、そういう対象だったわけです。

Aさんはどう思ったかという、こんなに体というのはちょろいのだと、体は、もう自分の言うことを聞かせるのが、こんなに簡単なものなのだ、というふう思ったわけです。これは大変興味深いと思うのですが、Aさんにとって摂食障害は、Aさんの場合は、食べて吐くということをしてしまうのですが、それというのは、いわゆる摂食障害という意味では症状なのですが、同時にコーピング、対処法だったということです。つまり摂食障害という症状自体は、もちろんない方が健康なのですが、それがあって、生きていけているわけです。それは対処法でもあるのです。

多くの場合がそうなのです。症状でありコーピングであるというのは、体にはとても多く起こることです。例えば私の吃音とかも、吃音でどもって連発しますよね。妻という言葉はとても言いにくいのですが、妻が言えなくて、つ、つ、つ、妻となったりします。そうすると、そのつ、つ、というのは、連発という吃音の症状なのです。吃音というのがどうして起こるかという、妻と言いたいときに、「つ」から「ま」にうまく行けないから起こるのです。「つ」を発生するための口の形から、「ま」を発生するための口の形に、スムーズに変形ができないというときに、「つ」から「ま」に行く道が使えないから、つ、つ、つ、つ、と、そこで詰まっているわけです。だから体的には、「ま」に行くための試行錯誤をしているのです。本人からすると、そういう意味では、同時にコーピングなのです。

吃音というのは症状であり、コーピングであるという両方の面を持っていますが、障害でなくても、例えば病気になって、熱が出たというときの、その熱というのが、会社に行けない、学校に行けないという意味では、もちろん症状なのですが、でも、その体に入った毒と闘うための対処法とも言えます。そういう意味で、体がやっていることというのは、どっちにも取れます。多くの場合、人間の事情によってどっちかに決まるという、そういうことは多くあります。

Aさんにとっても摂食障害というのは、そういう両面を持ったことだったわけですが、でも、Aさんの場合は、それがあまりにも長く続いて、どんどん体を管理する、体をコントロールして自分の支配下に置くという、そういう関係が強固になってしまいます。この後お話ししますが、30代前半で、その関係が一気に破綻します。30代までは、完全に体に言うことを聞かせていて、体からどういうことを感じているかというのは、一切キャッチしない、そういう関係になってしまっていたのですが、30代で倒れて入院をして、そうしたら、体が一切言うことを聞かなくなりました。現在では、体と自分の関係をどうやったら修復できるかということ、ずっと考えていらっしゃる方なのですが、そういうA

さんにとっては、体は他人だというふうにおっしゃっていました。これも一種のメタファーだと思います。とても興味深いメタファーだと思うのですが、よく言う言い方は、他者という言い方です。ではなくて、他人というふうに言っています。他人は他者よりも、かなり強い表現だと思います。つまり自分と利害関係を共有していない存在です。つまり他人の反対は身内です。身内だったら、利害関係を共有している仲間ですが、体が自分にとってそうではないと、そういうふう到现在ではなくなってしまったのです。つまり30代まで、ずっと体に言うことを聞かせてきて、その反動で体が言うことを聞かなくなったときには、全然利害関係を共有していないのです。例えば、自分は今外出したいと思っているのに、体が全く動かないとか、こうしたいと思っているのに、体が違うことを反応して返してくるとか、全然同じ目的に向かえないという、そういうふうになってしまったと言います。

そうなったときに、30代になって、10代から30代までにずっとダイエットをしてきた自分と体の関係はどうだったのかと振り返ったときに、この「DV夫とその妻」というメタファーが出てきます。つまりこのAさんにとっては、自分はDV夫だったというふうに言います。体イコール妻で、体に、もうとにかく言いたい放題、やりたい放題で、ずっと言うことを聞かせてきました。それに対して、もう奥さんの方が我慢できなくなって、反抗をしてきたと、それが30代に起ったことなのだと、そういうふうにおっしゃっていました。

少しそのAさんの言葉を参照してみますと、これはAさん自身がおっしゃった言葉です。「私はやっぱりDV夫なんですよ。被害者は体っていうのは、とても思います。そこが私の中では当たり前だったんですけども、みんなは違うんだ、もっと一体感があるというか、そんなに理解可能なものではないんだなど。今まではだまされて支配して管理して、それが今度は翻弄されて、そのおかげで、みんながみんなそうじゃないんだということを知りました」。というふうにおっしゃっていて、体が被害者だというふうにおっしゃいます。

私自身は、そんなに自分の体が乖離しているという状況を経験したことがないので、体が他人になるということが、全然想像がつかなかったのですが、2時間ぐらいお話を聞く中で、AさんがDV夫という表現をされて、それで少し、そういうことなのかなと、少し分かった気がしました。それはとても印象的なメタファーでした。

摂食障害の方が、多くの方が経験されること、それが今日のテーマにも関係してくるのですが、感じるということができなくなるのです。Aさんだけではなくて、皆さん、体をコントロールするということをずっとやってしまうので、例えばご飯を食べて、おいしいなと思えなくなるのです。〇〇カロリー摂取みたいな、数字の計算になってしまうので、食べて、体がどう感じるかということに、全く耳を傾けられなくなってしまいます。そういう体の声が聞けなくなってくる状況の中で、Aさんの場合は、少し今日疲れたとか、疲労感みたいなものが、全然分からなくなってしまって、働きたいだけ働くという、そういう生活になってしまいました。彼女のメタファーで言うと、何かずっと切れ目がないメロディーをかきながらいるという感じというふうにおっしゃっていて、1個お仕事が終わったら、またすぐ次を開始している、またすぐ次を開始しているというように、この仕事は終わったら休もうと

思っているのだけれど、実際終わると休めなくなって、次をやってしまうという、何かそういう状態がずっと続いてしまいました。

それで30代で、さっきお話ししたように、一気に倒れて、病院に担ぎ込まれて即入院と、そういうふうになってしまいました。それをAさんは、体の逆襲、強制的な中断だというふうにおっしゃっています。Aさんの入院後の状況についてのお話を読んでみたいと思います。「とにかく体が怖かった」というふうにおっしゃいます。「すごく怖い。いつどうなるかわからない体になっちゃって、いきなり息止まるし、いきなりフワフワするし、いきなり鉛みたいになるし、これもう体の逆襲だわ、少し誰か助けてと思って、いろんなところに行ってみたり、ネットで調べたり、本を読みあさったりして、検査も受けたんですけど、異常なしで、神経系内科に何度も通って、体について大変悲観的になって倒れてから1、2年、本当にどん底でした」。というふうにおっしゃっています。体の逆襲というのも1つのメタファーだと思うのですが、やはり自分がそれまで抑圧してきたというやましきというか、自分が重ねてきた罪みたいなものに対する意識があって、それが一気に逆襲として返ってきたという、そのAさんの、自分の体の状況に対する理解というのが、とてもこの逆襲という言葉に凝縮されていると思います。

そういう、体が全然言うことを聞いてくれなくなってしまった状態を、Aさんが例としておっしゃったことがあります。例えばお風呂上りに、体にクリームを塗ったりします。そのクリームを塗って、体をいたわろうとしているのだけれど、クリームを塗っても、体が「何やってんの？」みたいな、そういう態度を感じるというふうに、Aさんはおっしゃっていました。「もう私のことさんざん虐げといて、今さら、そんなクリームなんか塗ったって、何も私は和解しないわよ」みたいな、そういうつんつんした雰囲気を感じるというふうにおっしゃるのです。つまり、体が自分のものであるというのは、全然当たり前ではないのです。その関係が1回壊れてしまうと、それを修復するのはとても難しいのです。その難しさを、Aさんは、こんな表現でおっしゃってくれました。「私が今置かれている状況は、踊り方を忘れたムカデのような状態なんだ」。これは有名な逸話だと思いますが、千本の足があるムカデが、上手に踊っているのですが、それに対して誰かが、そんなに多くの足があって、よくそんなに上手に踊れるねっていうふうに言います。そしたらムカデが、はっと動きを止めて、そこから上手に踊れなくなったという話があって、つまり意識せず、考えないでやっていたことというのが、考えながら、意識しながらやろうとすると、急にできなくなるという、そういうことはよくあるということです。Aさんも、ダイエットをする前は、もう当たり前のようにご飯を食べておいしいと思っていたし、体との関係も良好だったのですが、いったんそれが途切れて、もう1回関係を回復しようと思ったときに、もうできないのです。当たり前をやっていたことを、意識的にやるとなると、もうその壁はなかなか越えられないということです。

どうやったら、もう1回、その体との関係を修復して、共存の目的に向かっていけるのか、他人ではなくなるのか、その方向を、Aさんはずっと探していってらっしゃいます。例えば演劇

を最近やっていらっしゃるそうなのですが、そういったことも、少し何かきっかけになるのではないかと、そのようなそういう調整も、今なさっているところです。現在の体との関係について、こんなふうに語っていらっしゃいます。「DV 夫の中には、妻に申し訳ないことをしたと思う人もいると思うのですが、どうしたらもっと言うことを聞いてくれるかなあっていう下心があって、状況を理解してるようで、理解できてない男もいる。たぶんそういうパターンなんです」。やはり自分の心は、体がどうしたら、また元のように聞き分けよくなってくれるのかなと思っているのだそうです。つまり体との関係を、もう 1 回よくしたいと思っていること自体が、何か体をもう 1 回コントロールしようとしている、そういう下心を、自分に感じるというふうにおっしゃっていて、人を許すとは何なのかということ、大変考えさせられる話だと思うのです。「ごめんなさい」と言ったからといって、許されるわけでは、それだけで関係を回復するわけではなくて、何か違う仕方でも誠意を示さなくてはいけないのだけれども、それを示せば示すほど、何かわざとらしくなって、どんどん関係をつぶしていくという、何かそういうふうに、A さんは、現在のご自身の状況を、今捉えていらっしゃいます。というのが 1 つ目の例です。

2 つ目があって、今度は B さんのお話に移りたいと思います。B さんは、私よりは年齢が、10 歳以上上の方です。彼女は「海ほたる」というメタファーを使って、彼女自身の状況というのをお話ししてくださいました。B さんは、大学生時代に一人暮らしを始めて、それがきっかけで過食嘔吐が始まりました。そこから 25 年以上、ずっとその過食嘔吐の症状と一緒に、生活をされてきました。その間、ご結婚、ご出産はされていますけれども、ずっとその症状がありました。そもそもこの「海ほたる」とは何なのかということなのですが、この写真です。海中に住んでいる発光する生物のことではなくて、東京の東京湾のアクアラインといわれている、川崎と木更津の間を結んでいる高速道路があるのですが、その途中にパーキングエリアがあって、そこが海ほたるといわれています。そこはパーキングエリアであると同時に、少し食事ができたり買い物ができたりという、観光施設になっています。この海ほたるが、B さんの摂食障害にどう影響するかということなのですが、摂食障害といっても、症状のタイプが幾つかあります。1 つは、いわゆる拒食というタイプで、最低限しかご飯を食べない人です。それから過食という、量を多く食べる症状があります。そういう方がいて、その中間に、B さんのような過食嘔吐というタイプの方がいらっしゃいます。この場合は多く食べます。本当にお腹が苦しくなるまで食べて、その後一気に吐きます。そういうことを、本当にひどい場合だと、1 日に 3 回そういうことをやってしまいます。それがやめられないという、そういう症状です。

B さんは、食べても吐けたのです。多くの場合手をついで吐くのですが、それを上手にできる人とできない人がいるわけです。B さんは、たまたまやったら、できてしまったのです。だから、どんなに食べても、吐けば大丈夫だから、ダイエットしていたとしても食べられるという、その方法を知ってしまったからこそ、25 年以上、この症状とずっと付き合うことになったのだというふうにおっしゃっていました。その食べて吐くというのを、この



はやめたいんだけど、体は買い出しにいっちゃう」。出費も大変ですよ。多く食べて、吐くためだけに買って、食べて、お金は捨てるようなものです。本当はこんなことやめたいのだけど、やめられない。「天気予報を見て、あしたは雨だと分かると、その次の日の分まで、全部買い出しに行ったりとかもしてました」とおっしゃっていて、とても計画どおりに、そのやると決めたことはやらないと駄目、そういうルールに乗っ取られたような状態になっていったわけです。

とても面白いのが、Bさんはこの状態をどういうふうに回復されたかということです。最初のきっかけは、多く食べて吐くという過食嘔吐が、楽しめるようになるというのが、最初のきっかけだったそうです。普通に考えたら、治るということは、自分が持っている症状を手放すということなので、過食の回数が減ってくるとか、多く食べたけど吐かないとか、何かそういうことが回復の最初のステップなのかなと思います。でもそうではありませんでした。積極的にやり出すというのが、過食嘔吐の回復のきっかけでした。例えばBさんと、今日は家にいて何もなければ過食嘔吐し放題だ、やった一みたいな感じでできるようになったのです。これは大変面白いテーマだと思っていて、やっている行為は変わっていないのですが、それが自分にとってはとても楽しい行為になってきたのです。別の言い方をすると、ルーチンとしてやっていたことではなくて、何か新しい出来事みたいな、そのように思ってくるということです。そうなってくると、少し感じられるようになってきます。摂食障害というのは、さっきもお話したように、感じるということがどんどんなくなっていく、そういう側面を持っているのですが、何か楽しいなと感じられるふうになったのです。そうすると、その「楽しい」の次に、「面倒くさい」というのが出てくるのだそうです。何か今日は面倒くさいから、もうそんな過食嘔吐、1日なくていいかなというふうになったそうです。ルールに乗っ取られて、何か脅迫的にやっていたのが、まあ、今日はいいかなというふうに思えてくると、だんだん回数も減ってきます。でも、その面倒くさいというのも、自分の体の状態に対して、ちゃんと感じられるようになっていくということなので、そうなってくると、過食ではないことでも、何か面白いことが発見できて、どんどん世界が拡張してきます。そんな変化を経ていったのだというふうに、Bさんはおっしゃっていました。

さらに、もう少し具体的なエピソードとして、Bさんが話してくださった回復のきっかけです。3つぐらい話してくださったのですが、1個目は、まず転職です。転職が摂食障害から解放するきっかけになったのだそうです。Bさんは、昔は古美術を扱う施設で働いていました。それが、ご家族の引っ越しをきっかけに、現代アートのギャラリーに転職をされました。そうすると、古美術というのは、もう評価が厳格に決まっている、とても厳密な世界だったのに対して、現代アートというのは、何でもありと言うと少し失礼ですけども、こんな作品なの？ みたいなものが多く来るわけです。そういうのに出会っていくうちに、何かこうでなきゃというのではない視点というのを、どんどん拡張していくことができたというのが、まず1個目のきっかけでした。

2個目が、お子さんを出産されたのですが、そのお子さんが難病を持っていらしたのです。

メビウス症候群という難病を持っていらして、顔に表情がなかったり、口の形成が不完全だったりという、そういう障害を持っているお子さんと出会われたわけです。そのお子さんとの出会いが、人から見ると非常に大変なところに、更に大変だねというふうに見えなくないのですが、Bさんはそうは思わずに、その娘さんを見て、「あ、こういうふうな生き方もあるんだな」というふうに思われたそうなのです。足はないのだけれど歩けているし、表情はないけれども、人とコミュニケーションができていて、これでも別にいいのだなというふうに思われたと、そういうふうにおっしゃっていました。たまたまその娘さんは、足の形が北海道の礼文島の形をしていたらしくて、家族旅行で礼文島に行ったりするという、そういうこともなさったのだそうです。

3番目です。だんなさんが大変ユニークな方で、実はだんなさんは潰瘍性大腸炎だったのです。そのだんなさんが、当時自分の症状というのと比較して、だんなさんは、さっきの高速道路海ほたるで言うと、あちこちが燃えていて、食べてもうまく消化されないけど、自分の場合はそうやって、海ほたるでまた帰るといって、何か違う病気なのだけれども、仲間ができたみたいになったのです。そして彼女のことを、「牛だったらよかったのにね」というふうに、だんなさんがおっしゃったそうです。牛が胃を4つ持っていて、1回食べたものを、また口の中に戻して反すうするというのを指して、だからだんなさんはこうおっしゃったわけです。とてもユーモアのある言い方ですね。そういう言い方をしてもらったのです。これも一種のメタファーだと思いますが、何か自分が牛なのかもしれないと思えたときに、何かまたそれが1つ楽になるきっかけになったというふうにおっしゃっています。面白いのは、全然摂食障害と関係のないことが、回復のきっかけになっているということです。摂食障害とも、食べるということとも関係がないことが、回復のきっかけになるのです。Bさんの言い方によると、「何かこういうさまざまなきっかけを通して、それまでは木しか見てなかったのが、少し周りにある森が見えるようになったんだ」というふうにおっしゃっていました。

やはりこうでなきゃというのがあって、それがあまりに強固だと、そうでない可能性が見えなくなってくるわけです。でも一方で、回復するというのは、その障害を得る前の自分に戻ることはないのです。単なるタイムトラベルとして過去に帰るといって、1回その障害を経験すると、それはもう不可能です。回復というものは、そうやって過去に帰ることではなくて、新しい自分というものを探ることなのです。それまでの自分にはなかったような新しい自分、自分らしいのだけれど、自分ではない自分、それを探ることというのが回復の過程だとすると、こうでなきゃというものから解放されて、それまで見えてなかった可能性を発見できたときに、それが実は回復につながっていくのです。

そうやって、こうでなきゃというのから解放される時、どういうきっかけがやってくるかという、それは非常に偶然の要素が大きいというふうに、Bさんはおっしゃっていました。私たちは病気になったり障害になったりすると、常に原因を探しがちだと思います。因果関係というか、物事の理解の仕方というのが、非常に強固ですし、サイエンスの基本だっ

たりするので、何か原因を特定して、その原因を取り除けば、現在の自分の状況が改善すると、そういうふうに使われがちだと思います。実際に病院に行くと、例えば手術をして癌の病巣を取り除くとか、そういうことをするのが普通だと思います。でも、その原因を特定するプロセスと回復のプロセスというのは、必ずしも一致していないことも多いです。原因を取り除いたとしても、それがそのまま回復になるわけではありません。このBさんの場合も、一時期はカウンセリングに通って、何で自分はこういうふうになってしまったのかということの原因を探ろうとしていたようです。お父さんとの関係とか、心理的な要因というのを、必死で探していました。ただそれをやっていた時期というのは、何か自分はこういう人なのだということを、どんどん固めてしまっていたそうです。Bさんは、実はどんどん治りにくくなっていたのではないかとこのふうにおっしゃいます。回復というのは、こういう理由で、自分は今困っているというのは、それはそれでいいとして、でもそれではない可能性というのを探すことなので、あまりその原因に執着すると、実は回復が止まるのではないかとこのことです。これもBさんのお話で、とても面白い例でした。

そう言われてみると、回復、健康になるということについて、実は、私たちは解像度が低いのではないかとこのことに気付かされます。つまり病気の名前というのはとても多いですけれども、健康というのは、多分1種類しか想定されていないと思います。健康何とかの健康、何とか的健康とかというように、数種類はありません。でも病気とか障害を経験すると、それが完全になくなる、完全に前の状態に戻るとこのことは、基本的にないわけなので、そうすると、そういう症状、障害を抱えた上での新しい健康というのを、提示しなくてはいけなくなります。交通事故で片手がなくなりました。その片手がない私というのを、改めて再提示する、新しい、片手がない健康というのを再提示する、そういうことをしなければ回復できないのですけれども、そっちにあまりにも目が向いてないのではないかとこのことにも気付かされます。

例えば長野県の軽井沢病院の稲葉俊郎先生は、こんなことをおっしゃっています。健康というのは答えではありません。答えとして、もう存在しています。こういうのが人間にとっての健康ですよ、正解ですよというふうには存在しているのではなくて、もっと自分自身の体とか心とか魂とか命とかと対話し続けるための問いとして存在しているのではないかと、そんなふうにおっしゃっています。つまり自分で探し求めるものだというのです。病院に行って治療をしてもらって、さあ、健康ということではなくて、新しい自分の健康の形を自分で探さなければいけないという、そのためのトレーニングとして存在するというので、本当になるほどなあと思いました。

というところまでがBさんの話、2つ目の話なのですが、少し時間がだいぶ押してしまっているんで、3のスイッチの話は少し飛ばさせていただいて、さっきの最初の問いですね。メタファーというのは、単なる飾りものということ、ここまでのAさん、Bさんの例を通して考えてみたいと思います。言語認知科学という分野があるのですが、その古典といわれている『レトリックと人生』という本があります。ジョージ・レイコフという人が書いた本

なのですが、この本の中で、こんなメタファーの例が出てきます。Argument is war、議論は戦争であるという、そういうメタファーです。これはどういうことかという、私たちが議論するということについて語る言葉というのは、全部戦争からやってきています。例えば相手を論破するとか、戦術を立てるとか、的をはずしているとか、ここで挙げられている例は全部英語ですけれども、日本語でも、やはり議論をするときに、私たちが使っている言葉が、とても闘いをベースにした言葉を使っています。私たちはそういう言葉を使いながら、それがメタファーだとは思っていません。論争とか論敵とか、そういう言葉を使うときは、決して比喩表現だとは思っていないのですが、よく考えると、全部議論を戦争として、戦争のメタファーで言語化してしまっているわけです。

これはどういうことなのだろうというふうに、ジョージ・レイコフは問い掛けます。こんなふうに言っています。「議論を、戦争という見地から見ない方から想像してみよう。そういう文化では、議論に勝ち負けはないし、相手を攻撃するとか、逆に相手の攻撃から自分を守るといったセンスもない。優勢、劣勢といったセンスもない。議論をダンスのように考えてみる文化を想像してみるとよい。議論をする者は踊り手と見なされ、議論の目的は、バランス良く、見た目に美しくダンスするように、論じ合うことである」というふうに言っていて、つまり私たちの文化というものは、議論を戦争というメタファーを使って言語化するからこそ、その議論そのものも、何か戦争っぽくなってしまっていると言うのです。だから仮に議論をダンスのメタファーで例える文化というのが存在したなら、その議論する行為そのものも、もっとダンス的になっているだろうというふうに言っているわけです。つまり実体があって、それを表現するためのメタファーではなくて、どういうメタファーで語るかが、現実そのものを変えるという、そういうふうに、この本では言われているわけです。さて、そういう言い方をすると、語り方、使うメタファーを変えることによって、現実の見え方も、また変わってくるということになるかと思います。ジョージ・レイコフは、続けてこんなふうに言っています。「メタファーの本質は、ある事柄を、他の事柄を通して理解し経験することである。議論は戦争の亜種ではない。議論と戦争は全く別のものである。しかしながら議論は、部分的に戦争という見方によって成り立っており、またその観点に立って理解され、行われ、研究されているのである」。だからメタファーというのは、決して飾りではないのです。それ自体が現実の見方をつくるし、現実そのものをつくる、そういう、非常に強力なツールであるということです。

そういう観点から見たときに、先ほどのAさんとBさんの例もそうなのですが、やはり障害とか病気の当事者の方というのは、極めて魅力的なメタファーを使っているのだというふうに思います。それがなぜかという、やはりそれを必要としているからだと思うのです。非常に混乱の中にあるときとか、自分の体が思いどおりにならないというときに、やはり何とかしてこの状況を理解したいというふうに思うと思うのです。それは、仮にその状況に病名が付いたとしても、病名はやはり一般的な名前前で、もちろんそれ自体はいいのですが、それだけでは済まなくて、私のこの体の状況を理解したいと思うわけです。そうなったときに、

当事者の方は、何とかしっくりくる言葉を探そうとします。そういう言葉がメタファーになって出てくるのです。私はDV夫なのだとか、私は海ほたるなのだというふうにするによって、その混乱した状況から、少し距離が取れるし、理解ができます。そうすることによって、ではこういう手を打ってみようとか、こうしたらもっと体との関係がよくなるのではないかという、そういう考えのきっかけも与えてくれるのです。だから、極めて切実なところから、当事者の方のメタファーというのは出てきていると、そういうふうに思います。

整理すると、メタファーは決して飾りではありません。それは世界や自分の置かれた状況を理解する枠組みです。当事者の方の話を聞いていると、混乱した状況や耐え難い状況、危機的な時間から距離を取り、生き抜くための杖、勝つための杖になるのではないかと、そんなふうに思います。健康だったら、あまりメタファーは要らないと思います。でも、やはり混乱した状態、その中で何とかやっていかないといけないというときに、初めてメタファーの重要性というのが、立ち現れてくるように思います。

この数年は、人類がまさに危機というのを経験したわけで、その中でもさまざまな、私が置かれている状況を理解するためのメタファーというのがつくられたと思います。例えば、大国の指導者のうち何人かが使っていたのは戦争です。これはコロナウイルスとの戦争であるわけだというふうにおっしゃって、戦争なのだから例外状態になります。だから人権も制限されて仕方ないという、そういう道理をつくるための、1つのメタファーとして、戦争としてのコロナウイルスということが言われていたかなと思います。

一方で、例えばパオロ・ジョルダーノという小説家は、今私たちが向き合っているものは、コロナウイルスの引越しの体という言い方をしていました。それはどういうことかという、もともとはコウモリを宿主としていたコロナウイルスが、コウモリの生息環境というのが、人間のいろいろな環境破壊によって、どんどん壊されていって、人間とコウモリが接触する機会が増えました。そうなったときに、それまでコウモリの体に住んでいたコロナウイルスが、人間の体に引越しをしたのだと、そういうふうに解釈をされていました。引越しというふうに考えると、それは環境の問題になってくるわけです。そのため、どういうメタファーで理解するかによって、全く見え方が変わるし、それに対する対処法も変わってくるという、そういう経験を私たちもしたのが、この2、3年かなというふうに思います。

2に行こうと思ったのですが、ここでもう、既にだいぶ時間がなくなっているのです、少し2は飛ばしまして、もしQ&Aの時間に時間があつたら、ご紹介したいと思います。最後のところ、3です。お話しして、終わりにしたいと思います。

まず今日は、当事者のお話などを通じて、メタファーは何かと考えてきました。そのメタファーというのは、何かと混乱とした状態、混沌とした状態に、最初に与えられる言葉なのです。そうすると、やはりそういうものがあってこそ、混乱した状態を生きていくきっかけになるし、逆に言うと、ちゃんと感じる、落ち着いて、その状況を感じるための手がかりになると言えると思います。ただその感じるということは、それが結構難しいのではないかということ、私自身は考えています。例えば大学の授業をしていますが、私は美術の教員なの

で、学生に、例えば絵画を見せて感じてほしいわけです。でも、それは非常に難しいなと思っています。私の授業は100人ぐらい学生がいるのですが、授業中に、その学生を前に、今日はこの絵画を観賞しますというふうにスライドで見せても、授業の2回目とか3回目までは、みんな全然感じてくれません。どうなってしまうのかというと、正解探しをしてしまうのです。みんなは、この絵画は、こういうふうに解釈するのが正解かなというのを探そうとしてしまうのです。本当に自分がどう感じているのかということが、なかなか出てきません。だから講義をしても、最初の2回、3回は、みんなが正解を言わなくてほと、とても緊張しているのを解除して、緊張を解除して、武装を解除して行って、リラックスしたときにやっと、自分はこの絵画はこう思いますという言葉が出始めるのです。

そこで出てくるのも、やはり最初はメタファーです。何かこの絵は、サッカーの試合みたいだとか、まるで突拍子もないメタファーが出てくるのですが、それが出てきたときは、やはり本当に感じていることに、彼らなりに迫ろうとしているということだと思います。回数を重ねていくと、なぜ自分がそのメタファーを考え付いたのかということも言語化できるようになってくるし、どんどん使える語彙も増えていきます。最初は「すごい」とか「やばい」とかしか言えなかったのが、だんだん細かい言葉が使えるようになってきます。そういう意味で、感じるができるようになるということが、結構難しいことだなということを、大学の授業の中でも日々思っています。

そのことについて少しお話して、終わりにしたいと思います。1つ例としてお見せするのは、申告飲水と書いてあります。精神障害の統合失調症の方で、慢性化した方によく出てくる症状があって、それは水を多く飲んでしまう、1日中、水を飲んでしまうという、そういう症状です。だから多く水を飲むと、どんどん血液が薄まって、意識障害とかまで出てきて、水中毒という状態になってしまいます。だから、これを何とかやめないといけないわけです。それをやめるにはどうしたらいいかということなのですが、この山梨県立北病院というところが開発した、それに対する対処法が、この申告飲水というものです。これは大変面白くて、どうするかというと、単純です。患者さんが、これから水を飲みますと、ちゃんと申告をします。「私、これからお水を飲みます」と言って、看護師さんがそれに付き合っ、一緒にコップに水をついで、テーブルに座って、さあ、飲みましょうと言って、ごくごく飲むという、それだけです。それだけで、飲む水の量がどんどん減っていきます。これはどういうことかということ、多く水を飲んでいるときというのは、患者さんは感じられていないのです。大変観念的にとらわれていて、自分の体には毒がたまっているのを、それを浄化するためにも、多く水を飲まなければいけないというような、そういう観念にとらわれていて、実際のお水の味というのは、感じられていません。でもちゃんと社会化して、自分以外の人も一緒にテーブルを囲んで、コップで「このおいしいお水を飲みましょう」とすると、感じられるようになってくるのです。そうすると、そういう観念で水をはがぶがぶ飲んでいたのではなくて、ちゃんとこの水を飲むというふうに、世界と出会えると言いますか、しっかりと感じているようになるわけです。そうすると、だんだん自分を乗っ取っていた妄想から解放

されることができて、症状が治まります。そういう意味で、感じるということは、非常に大事なことだし、でも、あんなに簡単なことでできるようになるのだということを教えてくれる例です。

特に最近、若い人たちは、スマホとかネットとかあって、新しい情報をわーっと摂取するという、そういう生活の中にあると思います。やはりそういう、わーっと摂取する状況というのは、さっきの、水を多く飲んでしまうのと同じで、一個一個感じるということが、どんどんできなくなってしまいます。できなくなっている状況に、どうやって感じるということをつくるのか、それが私自身の大学での仕事だと思っているのですが、そのためには、やはり1回立ち止まるということなのかなと思います。体をリラックスさせて、さっきの摂食障害のBさんではないですけども、こうでなくてはというルールとか規範から、少しはずれてもいいのだと思えたときに、やっと感じるということが始まるので、何かそういう場所をつくるという、そういうことが大事なのではないかと考えています。

まとめとしては、感じることを感じる。つまり自分が本当に感じたいことを、ちゃんと感じるというのは、容易ではないと思います。それができるようになるためには、1回立ち止まって、時間を止めて、目をつぶるような、そういう注意力というのが必要なのです。それは、何とかしなければならぬと思っている状況から解放されることが必要だし、そこで手掛かりになるのは、メタファーのような言葉です。その言葉を使って、自分が感じていることを探っていきます。それらと同時に、こうでなきゃ駄目という状況から外れることなので、不完全な自分をさらすことにもなると思います。また学生と授業をしても、最初は、自分はこう思うと言うのは、とても恥ずかしいのです。でも、そう思ったことを素直に言うてごらんというふうに言うと、どんどん言えるようになります。やはりそうやって、自分が感じていることを、ちゃんと感じられる力を身に付けるというのは、社会に出たときに、例えば自分が虐げられたりしたときとか、もう社会的に大変きつい状態にあるのだということを、ちゃんと感じられる、その力になっていくと思うのです。そういう意味で、感じるということは感覚的なことではなく、みんなが同時に生きていくための力になっていくのではないかと、そんなふうに信じて、研究したりとか講義をしたりとか、していきたいという話でした。

すみません。半分ぐらいしか話せなかったのですが、終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

司会：伊藤先生、ご講演、ありがとうございました。せっかくの機会ですので、伊藤先生にご質問がありましたら、挙手をお願いします。マイク係が参りますので、よろしくお祈りします。

茅野：脇町高校の茅野と申します。伊藤先生、本日は本当に、ご講演、ありがとうございました。少し話が半分だとおっしゃる、その半分を聞きたい気持ちもありながら、関連することを願って、質問をさせていただきます。2つお尋ねしたいことがあります。

伊藤先生の著作などから、能力主義にどういうふうにあらがっていったらいいのだろう

というヒントをいつも頂くのですが、今日の話もまさにそうで、今日言葉について、本当に深く考えるきっかけを頂きました。私は、若いときは、生徒に文章表現の指導なんかをしながら、言葉を獲得していけばいくほど、生徒は自由になるし、いろんな世界とつながれるというふうに思っていたのですが、年を重ねていくと、言葉に絡め取られるようなことをとでも思うようになりました。例えば簡単な言葉で何かを処理してしまうという、そのことで、今日のお話でいけば、感覚みたいなものが失われていくということがあると思うのですが、今日、私が聞きたいことの1つは、まさにそのことでした。伊藤さんの『手の倫理』の中で言えば、多様性という言葉为例にして、言葉でレッテルを貼ってしまうと、それで終わらせるということに、どうあらがっていったらいいのだろうかということをお尋ねしたかったのですが、今日のお話の中でいけば、やはりそれは立ち止まって感覚を取り戻していくという、そういうことなのでしょう。学生さんがなかなか感じられないのを、武装解除をなさっていくという、そのプロセスも大変興味深いなと思ったものですから、そのことについて、もう少しお聞かせいただければと思います。私たちは、言葉に絡め取られるということから、どんなふうにして抵抗していけるのだろうかという、そこについてのお尋ねが1つです。

もう1つあるのですが、よろしいでしょうか。もう1つは、いろいろ教育も変わる中で、やはり教育工学的なアプローチが、教育の中にだいぶ入ってきています。目標がこうで、だからこういう活動を行う中で、こういう力を付けていくのだという、目標志向的なことが非常に入ってきているのです。それはそれで必要なものもあるというふうに思いながら、でもそれによって、やはり絡め取られていくような思いを持つことがあります。一番それを端的に感じるのは、成績評価のことです。本来とか理念的に言えば、その評価というのは、生徒の学習の支えになったり、励ましになったりするべきですし、そうありたいと思っているわけですけれども、やはりそれが難しいのが、管理したり統制したり、あるいは選別していったりするというところに働いていってしまう側面があって、伊藤さんも大学教員として、学生さんの授業に対して、成績評価というのをなさると思うのですが、例えば伊藤さんが、成績評価みたいなことについて、どう向き合っていらっしゃるのか、これが2点目です。2つ質問させていただきますが、よろしく願いいたします。

伊藤：大変な重要なお質問、ありがとうございます。

1点目の、そうですね、言葉に絡め取られる。それで逆に感じられなくなるというのは、確かに言われてみると、やはりそうだなというふうに思います。いろんなことが考えられるし、考えないといけないと思うのですが、実は一番大事なのは、沈黙というか、黙ることかなと思うのです。私は新型コロナのときに、分身ロボットというものの研究を少ししていました。分身ロボットというのは、外出ができない方が、代わりにそのロボットを外出先に持って行ってもらって、遠隔でそれを操作して、そのロボットに付いているカメラから、周りの様子を見たりとか、マイクからしゃべったりとか、あと手を少し動かしたりとかまでできる、そういう装置です。装置を使っていらっしゃる方がやはりおっしゃっていたのが、分身ロボットの一番いいのは、沈黙できることだというふうにおっしゃっていたことでし

た。まず今日みたいに ZOOM でやりとりをすとか、電話とか携帯でのやりとりもそうだと思うのですが、何か沈黙が許されなくて、どんどん多くしゃべってしまうことがあると思います。でも本当に贅沢なのは、何も言わず、じっとそこにただ座っているだけみたいな、そういうことなのかなと思うのです。その中で、何か言いたいことがたまっていったりすればいいと思うのです。教育でもアウトプットしなさいと言われてたり、インプットしなさいと言われてたりと思うのですが、ただの器になってたまるのを待つみたいな、そういう、何か能動性ではない時間ですね、そういうところが大事なのかなというふうに思っています。そうすると、何か簡便には言葉が使えなくなるでしょうし、もっと丁寧に、言葉を反省しながら使うということができるようになるのかなというふうに思っています。

2つ目の評価に関しては、大学教員としても、誠に悩ましいところで、別に単位を与える仕事だと思っていないのに、学生は何かサービス業だと思っていて、単位を発行する人みたいに思われるので、大変悔しいのですが、自分のやっていることで、とてもシンプルなこととしては、レポートを課題にして書かせたら、かなり長めにコメントを書いて返却するということはしています。点数として付けるだけではなくて、長めにコメントを書きます。そのときに本音を書くというか、良い、悪いではなくて、ここは面白いとか、こんなふうにも言えるのではないかというように、つまり、その学生が書いたものに対して、いかに私が触発されたかということを書くようにして、人間として扱うというか、教員と生徒という関係ではなくて、君の考えていることは大変面白い、ここが面白くて、私はこんなに触発されたのだという状態をそのまま出すような、そういうコメントをしています。どこまで学生がその意図をくんでくれているか分からないのですが、何となくその評価を二元化して、二軸化していくというのでしょうか、通知評価というのは、いつも人間としての評価というのを返すようにしています。答えになっているか分かりませんが。

茅野：ありがとうございました。

司会：時間が来ていますが、もう一方ほど、質問があれば受け付けたいと思いますが、どうでしょうか。

中野：徳島北高校の中野と申します。先生の著書を、もう大変興味深く拝見しておりましたし、今回、先生のお話をお伺いできることで、とても楽しみにして、この会に参加しました。もしかしたら先生のおっしゃったことの、本来の部分ではないかもしれないのですが、回復というのは、過去への健康な状態の回帰ではなくて、新しい、腕のない方ならない状態で、その状態の健康の獲得というふうにおっしゃったのかなというふうに理解しています。障害のある方とのお付き合いを通して、そういう方たちは、障害がある状態でもと言うと失礼なのですが、その状態で十分健康で、幸せな生活をしているということも、実際肌で感じて知っているつもりではあったのですが、先生のお言葉を伺って、なるほどと、腑に落ちたところがありました。質問にならなくて申し訳ないのですが、大変感銘を受けましたし、ヨシタケシンスケさんとの共著、絵本を見ましても、こういうお考えで監修されていたのだなという感じがして、今度お話をお伺いできて、今までのことが腑に落ちたような気しております。

ありがとうございました。

伊藤：ありがとうございます。

司会：それでは少し残念なのですが、3時までというお約束をしています。ここでご講演をいただいた謝辞を、副会長の真相秀也、海部高等学校校長が申し上げます。

真相：失礼いたします。本会を代表いたしまして、一言お礼を申し上げます。

伊藤先生、本当にお忙しい中、徳島県国語学会のために、「言葉で感覚を手探りする」という題で、ご講演いただきましてありがとうございます。私自身も、伊藤先生のご講演を楽しみにしておりました。あっという間の講演時間でした。先生のお話を聞きながら、やはり先生のお話の中心には、別の世界の見え方があるのではないかということが、大きな視点だったかなと思います。それと私自身もずっと教員をしまして、その中で先生のお話を聞いておまして、反省やらをすることが多かったのですが、こうでなきゃいけないという視点が縛っているというようなお話があったと思います。教室でどうしても、こうでなければという視点で、子どもたちに、私自身も縛っているといったところが、反省がありました。それですね、その感じの話ですけれども、やはり生徒たちが正解探しをするということに、私どもも少し胸が痛くなりまして、そうでなくて、やはり自分がどう思ったのかということ、不完全な自分をさらすということも大事なのかなと思いますので、今日頂いた先生のお話を、学校現場でしっかりと生かしていきたいものです。

また先生、本当にお忙しいと思いますが、今後もお活躍いただきまして、また機会がありましたら、徳島県国語学会のためにまたお話ししていただけたらと思います。本日はどうもありがとうございました。

司会：ありがとうございました。それでは伊藤先生がご退出なさいます。今一度大きな拍手でお送りください。本当にありがとうございました。